して科学的認識を不可欠の支柱とするのは、科学の世界では、誤謬の承認を恐れないからであり、又、どんな権威にも誤謬の承認とその修正を要求する事ができるからである。常に世界内存在としての人間認識にとって、誤謬の発生は避ける事の出来ないものであり、誤謬をまさに誤謬として認める事こそ自己を研究主体者として位置づけその苦難な真実への道を「研究」を通して人々の前に明らかにして行く義務を負わなければならない。しかしながら前述した如く大学内の諸矛盾は唯一の客観的現実として我々の前に立ちはだかり自分自身を含む人間解放への存在証明として否定思想の展開がなければならない。再度この時、否定した自己は思想に問う「何をなすべきか」、思想は答える、自己の道かれたさまざまな階層（私の場合大学の助手としての深みの総体（社会）において捉れよと、そして「真に価値ある存在とは何か」と自ら他に問えと、この様な問いを持たざるを得ない人間存在に固有な思想としてとらえる事が出来る。そして更に、「将来に亘ってどんな人間と社会に向って歩もうとするのか」と問う。この様に自己否定の思想は自ら立ちあがりまいている現実が生み出す、その矛盾でうち立てられる可能性の全体をあくまで志向するものとして、個別「学問」の知的作業がこれら根底的な問に応ずる反証成論理体系を導く方向に不断に全体化させてゆく事を通じて、初めて、否定思想としてスタート点に立つ事を確認した。

ここにおいて、再度我々が志向している「運動とは何か」、「その運動と自己はどうかかわるのか」、「全共闘運動は在るのか」、「将来どの様な運動を創出しなければならないのか」が問われる思想である。

人間性の回復を運動実体としてかかげ未来を現在的に把握する基軸を、各個人がどの程度まで自分の主体的基軸としてとりこむ事が出来るかはその未来を疎外する現在の構造の中に、理論的にかつ実践的にどの程度まで各個人が入りこんで徹底した自己否定を展開しうるかによってきまる。

この様に否定志向そのものが持つ背水の陣立ては全共闘運動の質的状況から体制に対決を迫まるものとして自己を表現する行動であり、管理者の意味するものの断絶を保証し、かつ自己の存在基盤をかけての運動への加担を遂行させた作業仮定としてすぐれて有効であるし、自己否定の思想性による運動主体の均質化は旧来の大学の日常性をあらゆる部分において否定して行く運動を持続的に展開する状況をも保証している。

即ち、価値観の転換としての連続性は不連続を、旧来の論理を否定し、新しい論理に固執しえず現在する自己をかなぐり捨て思想の深化をつきつめた所に最終的状況を設定しうる可能性を展望する思想である。しかしながらかならずしも裸と否定の矛盾が歴史的に対決し得ないが未来を規定して行く現在を通じ相互矛盾突き出し戦いぬく意識をつらぬかなければならない思想として現在の思想性をそれ自体化し、能動的緊張関係を創出させてゆく必要がある。

占拠の思想

現在、闘争を果敢に行なっている学生、教授生、労働者に愛近者みに新しい形態の運動を展開している。その闘争を現実、自分の「持ち分」を単に拒否することだけでなく、また暫時「持ち場」を離れることのみならず、その「持ち場」を自らの手で長期に渡って物理的に固い、その中に閉じこもるという即ち「占拠」の形をとっていることに見られる。またその「占拠」した空間の中を自主管理し、新しい創造の場としていることも、もう一つの特徴であろう。

以下、「占拠」の意味について論述したい。

i. 「占拠」は拒否権の行使である。

およそ人がその存在の正当性を侵され、認められなくなった時、異議申し立ては最低自ら保障して行かねばならない。その方法は、初歩的には言論・文書等の抗議活動であるだろう。次には、非協力、不服従であるだろう。そして最終的には自分の実力でもって、自分に存在の有効性をとりもどす行動であるだろう。「占拠」はこの第三の意味に加えて、それは資本主義的所有形態の否定をも孕るであろう。

資本主義的管理社会において、強者と弱者との階級分裂は必然である。強者は財力・人力・政治力等の全ゆる力をもって弱者に対して立ちはだからない限り、資本間の競合に勝ち抜いて行けないし、そのために彼らの内部なる弱者に犠牲を強いたければ彼ら自身の存在をも確固たるものとなし得ないことは事実であろう。弱者はこれに対し適格な歯止めを、有効なる反撃手段を持ち得ない。持つことの余裕さえも事実上ない。何故なら彼ら独自の力を持てないことは彼ら自身の存在と既に交換されているからである。身も心も売っていないはずだがその様な関係が諸例の全てである。かくして弱者が好むと好まざると拘らず、自らの存在（生活維持）を得るためには強者から逆規定されてしまう。にも拘らず、弱者はより人間的に生きなければならない。全ゆる抑圧の下に置かれているが故に。その抑圧をはね返す以外に人間回復の方法はない。そのために歴史的には抵抗権・拒否権が最低行使されて来た。しかし、それらは所詮、強者、弱者の関係を少なくとも逆転するものではなかった。そして管理社会の上述の矛盾を根底的に誘出し、内迫し解消させるものではなかった。また、他の弱者に対の長期的連帯を求め、呼び起こす契機にもならなかった。それは東の間の水に浮かぶ泡沫でしかより得なかった。要するにそれは原理面を欠落した単なる対策でしかなかったという総括から、従来の抵抗権、拒否権行使と質の違った方法なり、手段が案出された。即ち「占拠」である。

「占拠」は従ってそうした意味での、己れの実力をもってなす拒否・抵抗権の最高形態であり、資本主義の最大矛盾の私的所有財産の否定であるが故に自己の生命を賭しての手段とならざるを得ない。一寸法師が赤鬼の腹の中へ入って活躍するのと似て、それは強者の心臓部へのより強固なアプローチであり、かかる目的達成的ベースキャンプである。権制の許容範囲を突破して行くが故に従来からの一般的に語られて来た拒否権そのものと、それに安易に寄りかかって来た弱者の姿勢そのものにも「ノン」を行動的思想的に提出するものとなる。であるが故に「占拠」は強者のみならず弱者の両者をもって霧散させるものとなったのである。具体的には大学・高校その他において見られるように「占拠」は実行力としては先進的部分に担わされて来たが、心情的には多くの共鳴を得ているのである。

ii. 「占拠」は自己確認のメディアである。

資本主義的管理社会においては、被管理者（弱者）の財産は何もないと云ってよい。自分の肉体でさえ、心や歴史性さえも他者（管理者＝強者＝体制）保存の産物でしかない。極言すれば弱者は強者から与えられた枠組みでしか、客観的には他律性と自己Vの持ち場を保障されていない。にも拘らず、小市民的な生活を強いられている多数の大衆はその本来的な、多くの矛盾を自覚し得ず、日常を営為して来た。そしてその日常性さえも、あたかも自分の努力のみで獲得しているかの如く錯覚に陥ち入っていちのが現状である。「思も角、オレは真面目にやって来た」という言動はそれを如実に物語ろう。そこにはもはや、現状を疑って見、過去と将来の接点としての自分の位置づけと将来に対する積極的な志向を失っている。これが特に「理性の府」といわれるA大学・教育機関Vに籍を置く、教職員・学生の大半であった。だが一度、学生によって一見の平穏さを根底から問い直された時、対応の仕方において、物の見事に、如何にその平穏さが自らの放企によってなされていなかったかを露呈せざるを得なかった。

学生が学ぶ者としてのA規定権利Vを放棄し「学問・大学・社会」等を根底的に追求する手段として、全力投球的に自らを極限状況に追い挙げざるを得なかった。それしか疎制さの疎隔に対決し、少くとも自他を覚醒させる方法はもはやない。だがそうすることによってのみ、真と偽、善と悪、事実と虚構、個人と組織、エヌタブリッシュメントと主体、等

における人間の実存を自己批判的に認識し得るのであった。また、それが根底的追求であるが故に、従来の方法（言論・文書・組織形態）を全く質の異った全身全霊を込めた組織運動論を以って安易な妥協を拒否し続ける闘いを展開した。こゝにその具現として「占拠」があった。それは全く、全ての擬制に肉迫して行く唯一の自己確認（Identification）としても提起されて来たと云ってよい。と同時に、そうした擬制の日常の中で自分を埋没し、のみならず擬制の存立を前提して来た自分を確認し得るもの即ちメディアであった。かかる「占拠」バリケードの中に〝青春はあった〟と〝楽しい〟と英雄が持てるのであろう。擬制の中で捲もれ、スポイルされ、自覚し得ず夫に迫分を取り誤し、失地を回復する暇びに満ちる「占拠」であり、苦闘ながら、真理へより全存在をかけてアプローチして行く時の、心から喜びが払拭された時の瞬々しさがその中には存在するからであろう。かくして「占拠」の中にこそ本来の自分があったことを見い出す。

III. 「占拠」は他者を告発するものである。

上述したように「占拠」は擬制の中における弱者（被支配者）の実体の発見と確認であり、隠れている敵の実体であると解するならば、それはたゞ単に自己を告発しただけに留まらず、自己を取りまく全ある環境、人間関係に深く影響を及ぼさずにはゐまされない。擬制の中で自己を対象化し、自己同一化しようとする時、擬制そのものに対峙し、それらを形成しているメカニズム・人間に対決が迫られる。

具体的「占拠」は第一に既成の秩序一般に対し、これが批判か、と告発し続・戦する。当初、人はそのアクシデントに防禦とする。しかし暫しはその実力行動を不法なもの・過激な暴力となし、所謂現象的解釈が先き立つ。過去そういう行動が自分に振りかかって来る因を内包しながらそれに気づかない。そして話合い、その個の民主的方法が未だ確立してない事実をもって拒絶を行なわれる。

しかし「占拠」は圧倒・法・権力・議会制民主主義・多数決・暴力等々の解釈に満然と疑問符をつける。それは既上の学問が過去、未すことの出来なかったほどの問題提起となり告発となる。こゝに於いて従来の学問の法則と一方での機関説・比喩説、本来の学問こそ反機力、反体制という姿勢を維持しつつ全ゆる弾圧の中で、自由を見い取って行くものであることが、又その闘い手こそ大学人であることが確認されねばならず、形骸化したるvvvvvでしか学問の自由、学問の自治等について語れない大学人が告発される。

嘆する中に「占拠」は平穏・正常・公序良俗等がいかなる存在下に置かれて来たかを暴り、それらが一方の路線であるが故に、権力の壁圧によって崩壊し、既成の秩序一般を維持しようとしている現実を現目的にせざるを得ない。そして告発される状況の中にある全ゆる人間が、生産的にはどうであれ各個的にはその機能の解放を内在的に要求して来たこと及び現状に対し自己同一化を図り、増苦を以って自己を疑化せざるを得ない限り、自己否定と自体を現した「占拠」の告発の対象から免れないであろう。そのことを「占拠」は結果的に物語る。従って「占拠」は、自己を疑産物に告発し、告発を告発することによって矛盾点を露出し、それを現実的に止揚発展すべく方法的に、同時進展的方針を往々にして採って来たが故に、更には人間存在そのものに疑問を投げかけ、それに殺企せず、真に戦闘的に成り得ない既成左翼をも告発の対象となることは云うまでもない。

かくして「占拠」は新しい創造の場である。

IV. 「占拠」は新しい創造の場である

「占拠」は全ゆる既成のものに疑問を投げかける。そしてそれは安易な物理的に、根底的に、同時に拡張的でなく、自己解放的である。であるが故に物理的に、そして根源的に「人間の解放、人間の管理化という根底的な目的」――サルトル――をめざすものである。こゝに否定から始まる新しい創造の指針がある。「占拠」の空間はその場である。既成秩序の中に、心理的だけでなく、物理的に対峙する場を獲得確保してこそ、真に自由な（非自由さから奪った）創造工夫の機会が得られる。かくしてこそ存在をかけた緊張が生じ、絶対的に妥協のない闘争が長期にわたって持続する。そうして、こうした「占拠」の場は全ゆる矛盾激化を呼び起すため各所に作られ、そこでは、持続するための戦略・戦術が語られるであろうし、体制と個との不条理的様がりを止揚的に理論だけでなく実践的に克服して行くためにも、弱者の全存在をかけた場が作られるのは必然であると云えよう。又、「占拠」が単なる改良、合理化でなく徹底的変革を志向するが故に、秩序を一時的にストップさせ、打撃を与えつつも、そこを新しい創造の核としなければならず、そこからこそ極限に立つ真の人間の覚知が達成されるといえよう。こうした「占拠」の中にこそ、本来の学問があり、疑似した自由があり、反権力・反体制教育・研究が醸成されるのである。生き生きとした差別など人間性の豊かな、全人的教育がかゝる所でしかなし得ないほど現在の「占拠」外の教育・研究・労働の場は荒廃していると云える。まったく「占拠」は投々に「八正常V の中の異端」が間違いであり、「異常さの中の八正常V」こそ真理であることを物語る。歴史的に常に、真理は少数の勇気ある支持者しか得られないのが選家者の宿命である。

物理的「占拠」とその中の創造はそれを否定する。弱者が強者の存在そのものの内を喰らいつつ、真の対決を迫るものが「占拠」といえよう。

V. 「占拠」は私的所有の否定である。搾取奪取である。

資本主義的管理社会において、弱者（労働者階級＝被管理者）は強者の性格とりわけ私的所有形態において、徹底的に疎外されている。即ち、弱者は精神的・物質的所有を基本的に奪い取られていることは、の項で述べた。

現日本資本主義国はかゝるそい基本的課題を全ゆる人間・部門・組織に所謂「資本の論理」を貫徹せしめようとして来た。そして殆んど、その意図が遂げられつゝあることの証拠が、高度に発達したと称せられる経済的・重化学工業的、人間疎外の化身であり、大量消費の「豊かな社会」の時代であり、それはもはや資本主義国家に歩みつゝあることは言を待たない。そうした状況において、一部の生産点と多くの大学で反乱が始大しつゝあることは意味深長である。学生諸点で起っている山猫スト、諸大学での「占拠」は資本の論理を強んと試図しながらも、それに抗する観念的な若年労働者、学生等によって反逆を買っている。このことは、資本の論理が人間の心をも完全支配するかに見えながらも、人間社会において多くの矛盾を生み出し、それに服従しない人間をも産出しているのである。かゝる人間こそ「体制の内なる自己」に気づき、反発する闘志である。彼らは資本主義の搾取矛盾を見抜き、それを支配する者と被支配者の断絶が存在していることを覚知し、それを変革し、新秩序者こそ自己であり、その自己こそ体制内の自己であり、従って体制管理者としてのそれでしかなかったことを「占拠」を通して確認した。そして「占拠」は、この矛盾を認識すべく、体制内自己覚醒定し、真に戦闘的に体制の未来構築をめざしての手で管理し、解放し、支配階級的特権人による所有形態を否定し、全人民に共有させるものである。従って、この「占拠」こそ資本主義的私的所有形態を否定し、全人民に共有させるものであり、権力奪取のそれであり、それを永続的に維持・発展させて行く保障（強権と実践の統一化）の場である。この「占拠」こそ、過去の体制批判的運動と大いに異る所である。

現実に、「占拠」は大学において多く起っている。そして、それは教育機関に限して云えば、もはや高校にも起り、増々、広汎になりつゝある。

かくして、学生、教師らが、「管理教育」を支配者より奪還し、奪権して、全人民に解放し、共有させて行く中で資本主義的分業の一部門である文部省を頂点とする日本の教育・研究体制Vを破壊し、脱いては支配体制そのものを転覆させ、全人民を全ゆる軛より解放させるものとなる。そのために「占拠」はあり、それは将に相手の肉を執拗に喰らいつゝ闘いの場を構築し、相手そのものを打倒して行く強好な方法と手段である。

以上「占拠」の意味について論述した。兎も角「占拠」の意味は深く、「かつて自明だと思われていたものの一切が、根底から問い直されている」所のその象徴であることに異存はない。過去から未来へ向けての、保守から既成左翼を強固に批判する運動のそれは象徴でもある。